

研究余録

太田道灌山吹譚について

水原 一

太田道灌が少女に簪を借りようとして山吹の花を示され、その意を解せず、これが契機となって歌道に精進したという話は広く知られている。私の幼時、銭湯のタイル画にその情景が描かれていたのを、今も鮮明に思い出す事ができる。この話を扱った大槻磐溪の漢詩も、絵に題した作で、よく詩吟に謳われているし、画題にもなり、落語種にさえなっている。道灌は山吹を差出した女について歌道を学んだとか、彼女を迎えて愛妾としたとか、或は山吹の小家は姉妹二人が居り、山吹の女はシンデレラ型の虐待された継娘であったのが、玉の輿に乗る事になったとか、姉妹の名も欠皿・紅皿（かひざら）（べにざら）と言ったとか、話は膨脹して近世文芸にもはやされる様になる。その舞台となった地も、江戸高田馬場近くの面影橋辺、または武蔵・相模境の金沢、また川越などと、史蹟の自家争いもあったようである。

文献上にこの話が現れるのは、湯浅常山の『常山紀談』巻一「太田持資哥道に志す事」であるらしい。一応その文を紹介する。

太田左衛門大夫持資は上杉宣政の長臣也鷹狩に出て雨に遭

ある小屋に入て簪をからんといふにわかき女の何とも物をばいはずして山ぶきの花一枝折て出したれば花を求むるに非ずとて怒て帰りしに是を聞し人のそれは七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞ悲しきといふ古歌のこゝろなるべしといふ持資おどろきてそれより歌に志をよせたり（以下歌の心得によって戦場に利を得た話あり。略す）

雪玉実隆の歌に雨にきるみのなしとてや山吹の露にぬるゝは心つかからを抄中後拾遺歌集云小倉の家に住侍るころ雨ふり侍りける日みのかる人の侍りければ山吹の枝を折てとらせて侍りけり心もえでまかり過て又の日山吹心得ざるよしいひおこせて侍りける返しにいひ遣しける兼明親王

七重八重はなはさけども山吹のみのひとつだになきぞあやしき。イニアル歎かなしき

『常山紀談』版本では右の「雪玉」以下は一字低記になっており、常山はこの形で異説・注記等を多く記している。三条西実隆の『雪玉集』は実隆薨（天文六年（一五三七）の後寛文二年（一六六二）に既に版行され、『常山紀談』（元文四年（一七三九）成立）に参考されたのであろう。『常山紀談』に引く実隆の歌は『雪玉集』巻上に「百首」と題して

折歎冬

雨にきるみのなしとてや山ぶきの露にぬるゝは心つかからとあり、特に兼明親王歌との関係を示してはいない。『常山紀談』活字本で末句「心つかしを」とするのは誤である。常山の注記に

も明記はしていないが、実隆歌に続けて『後拾遺集』所載歌と詞書をそのまま引いているから、兼明親王の「七重八重……」は、道灌の逸事に対する解説であると共に、実隆歌の注にもなっている。『常山紀談』の本旨から言えば実隆歌を挙げる必要はないし、道灌困惑の謎ときに役立っているわけでもない。たゞ「山吹」が「みのなし」と詠まれる例を補強したものである。実隆は「簑なし」は山吹自身のせいであると呼びかけながら枝を折る風趣を詠んだのであって、兼明親王歌にまつわる複人数のドラマ性はない。結局常山の知見を披露した一節であると評してもよいであろう。道灌の逸話の注としては、『後拾遺集』の兼明親王歌とその詞書とで充分なのであり、特に詞書の示す説得性は大きい。

ところで戦国の頃に、武蔵国の小家に住む女が、『後拾遺集』（雑の部に見える）この一首を自家薬籠中のものとする程に知悉していたのであったろうか。仮にそうであったとして、無言で山吹一枝差出す事に彼女はコミュニケーションの成立つ事を確信していたのであろうか。有名な話であり、風流な話ではあるが、その事実性については不審を拭い得ない。つまり余りにも出来すぎた話だと思われるのである。或は「山吹」が「みのなし」にかけられる花であるという言語遊戯がある程度知られていたならば、女は花を差出す所作だけで機転のきいた応答をしたのであって、謎ときの古歌を持ち出すまでもない。

つまり道灌・山吹の逸話とは、是非とも必要なわけではない兼明親王の歌も詞書も併せて鑑賞すべきものであり、道灌と女

とは、結局この詞書を演じた配役なのであった。道灌に謎ときの和歌を教えた人物もまた詞書の中に組みこまれていた役を勤めたのである。武将歌人道灌の由来を説明する絶好の話題として、古歌とその詞書が戦国時代に実演された——そう言うてよいかと思う。

この説話の形成は湯浅常山によってなされたわけではあるまい。戦国武将の中でも太田道灌には少なからぬ話題が伝えられ、和歌説話というべきものも数ある事である。『常山紀談』の書きぶりから見ても、常山の創作などとは思われない。また道灌の和歌学習の契機というのも、他に特に判明するような事もないが、父太田道真は早くより歌道に熱心で、河越の館に飯尾宗祇を招いて、文明元年（一四六九）『川越千句』を作っている。これには心敬も一座しているから、道真の風流の才は相当の域に達していたものであろう。これより先康正二年（一四五六）に道灌は江戸城を築いている。道灌二十六才である。応仁元年（一四六七）には江戸品川の道灌館に迎えられた宗祇は『独吟名所百韻』を作った。宗祇の初度関東下向は文正元年（一四六六）であるから、道真・道灌父子はかなり早くから歌道の好士として聞えて、宗祇とも交わっていたのであり、道灌の和歌修得は、父及びその周辺の環境から自然に促がされていたものと考えられ、山吹の逸話は、歌人道灌を納得するために作為的に伝えられた説話であったと見なされる。

ところで、宗祇の最初の自撰連歌句集『壹草』は文明五年（一四七三）の成立とされているのだが、その中に次の如き連句

が見出される。(『萱草』本文及び句番号は小西甚一氏校の古典文庫本による)前句の作者は不詳である。

簑なきみちは春雨もうし

155 かるやどの露の山吹おりわびて

実隆の『雪玉集』の歌とも似るが、勿論宗祇の句が先行する。ここには実隆歌にはない登場人物が見える。そして宿の庭前、雨中に咲く山吹の景は共通する。『常山紀談』の文芸意識は、『雪玉集』の実隆の歌にさえも、兼明親王の「七重八重……」を本歌として思い浮べるのであった。詞書も不可分の連想であった。それならばなお一層、右の宗祇の連句には——というよりも宗祇の付句の意識には、兼明親王の本歌も詞書も具体的情景として思い浮べられていたはずである。その情景とはすなわち、道灌・山吹説話を形造る誘因であり得たのではあるまいか。

小西甚一氏『宗祇』(日本詩人選16)には、牡丹花肖柏の『春望草』に

自然斎この花を愛せしことを思ひて

染めおきし心の色を形見とて見るも露けき山吹の花

とあるのを引いて、

自然斎は宗祇の別号、宗祇は山吹の花が好きだったのである。

と説明する。『老葉』に、

103 山ぶきのいはぬこころもうつるひて

338 たが袖ぞうらやまぶきのにほひかな

などの句が取りあえず見出されるが、特に山吹の句が目立って多いというわけでもないようである。しかし肖柏が明言し、追憶の和歌さえ詠んでいたのであるから、宗祇が生活の中で山吹を愛したのは事実であろう。(小西氏は右の書に、宗祇と山吹の花、という一章を設けているが、そこには『萱草』連句への言及はなく、一般に「憂さ」を以て宗祇の作風と見る傾向に対し、あえて「花やかさ」を詠じた宗祇に注意を喚起している)

あれこれ思い合わせてみるに、

◇宗祇は山吹の花を愛し、兼明親王の「七重八重……」を本歌とし、詞書の風情をも併せた詩情で連句を作っている。前句をも抱きこむ事によって、にわか雨、有りあわせぬ簑・宿・山吹等が具体的情景として歌われている。

◇(説話上の)太田道灌は、狩の行きずりに、にわか雨・小家・山吹の情景の中に有りあわせぬ簑を借りようとして辞られた。その劇的情景には兼明親王の「七重八重……」の歌が、謎ときの鍵として潜在している。

という頗る近似した印象が共通している。そして宗祇と道灌とは風流の道によって深く交わっていた——という条件を考えるならば、道灌・山吹の説話とは、本来宗祇の連句の解説として語り添えられたであろう『後拾遺和歌集』兼明親王の和歌及びその詞書の印象が、浮上し、形をなして、道灌歌道説話に組み立てられたものであったと推測してよいのではあるまいか。宗祇の連句の前句が誰の詠であったか、この連句がどの様な場になされたか、興味は尽きないが、妄説の譏りをおそれて、想像の示唆に止めておく。